

## 『好きなことと国際協力 ―フィリピンで学んだこと―』

上智大学 3年 小島 彩

「フィリピンに行って一緒に音楽を教えに行かない？」そんな友人の誘いに乗って、私は初めて海外に行くことになった。確かに私は音楽が好きだ。小さい頃から歌を習い、高校に入ってからはギターを弾き始めた。しかしこんな私に何ができるのであろうか。そのような疑問を抱きながら私のフィリピンの旅は始まった。

1日目、2日目にフィリピンのセブ島を観光した。大型ショッピングモール、ホテルがある観光地と少し離れた場所にスラム街、ゴミ山があった。そこにはストリートチルドレン、物乞いをする子どもたちが沢山いた。またきちんとした食事をとれない彼らは、薬物に手を出しお腹を満たしているという現状も知った。そんな彼らのために私に何ができるのであろうか。物資、食糧支援か、募金活動か、初めて目の当たりにする光景に戸惑いながら考えてみた。実際、学校で貧困問題について学んでいてもそれを解決することは自分にはできない。自分の非力さに失望をした。

3日目からはいよいよ音楽教室のお手伝いをさせていただいた。今回お世話になったNPO法人セブンスピリットはストリートチルドレンを対象にした音楽教室を開き、子どもたちが音楽を通じ生活を豊かに、そして生きる力をつけていけるように働きかけている。実際にこの活動が始まって以来、子どもたちに活気が見られ、また子どもたちの音楽発表を通じ、地域の交流が深まり、治安が良くなってきていることが分かっている。

始めは子どもたちにどのように接して良いか分からなかった私だが、子どもたちが温かく迎えてくれ、すぐに打ちとけることができた。トランペット、クラリネット、バイオリン、リコーダーと、子どもたちは活き活きと楽器を演奏し、笑顔で歌を歌っていた。本当にストリートチルドレンだった子どもたちなのか。音楽とはこうも人を笑顔にするのだろうか。そんな思いが胸の中から溢れてきた。子どもたちがマイケル・ジャクソンの『We are the world』を歌い終えた時、私の目からは涙が溢れていた。それと同時に音楽教育も立派な教育支援であると強く思った。私は子どもたちと一緒に日本の歌を歌ったり、ギターを教えてあげた。子どもたちは真剣に話を聴き、一生懸命ギターの練習をしていた。最終日には彼らにギターと鍵盤ハーモニカ、リコーダーをプレゼントした。彼らは満面の笑みでありがとうと言い、楽器を大事そうに扱っていた。

今回のフィリピンの活動を通じ、私は国際協力というものを遠い存在だと思い、難しく考えすぎていたことに気が付いた。確かにJICAやNGO機関が行っている有償資金協力、無償資金協力、技術協力に比べたら自分のできることはとても少ない。しかし、子どもたちと触れ合い、笑顔にすることは不可能なことではなかった。自分の大好きな音楽活動を通じて彼らの生活を少しでも明るくすることは可能であったのだ。

フィリピンには食糧や職場がなく困っている人が多くおり、支援を必要としていた。スラム街、ゴミ山でインタビューをした際に私は5人の子どもを持つ母親に「今幸せですか。」とインタビューをした。彼女は笑顔で「多くの家族に囲まれて幸せだ」と答えた。しかし

彼女は続けてこう答えた。「生活は困難であり、食糧、水、お金、職を必要としている。」と。現地に行き、支援の必要性というものを改めて感じさせられた。実際国連、政府の支援の手は現地に届いてなかった。現状を理解し、ニーズを把握したうえで支援を通じ、生活を改善していくべきだと思った。そして彼らの声をもっと外に届けていく必要性を感じた。

フィリピンでの経験を通じて国際協力の幅の広さを知り、身近に感じ興味を持つきっかけとなった。そしてそれと同時に大学での学びを深め、将来国際機関で働きたいという思いが強くなった。